

研究の動向

服飾史・服飾美学研究における一次資料の重要性：

梅花女学校創設期にみるイギリス女子スポーツ教育とのつながり

梅花女子大学 好田 由佳

1. はじめに

19世紀末のイギリスは余暇の時代を迎え、海水浴、クロッカー、スケート、ローンテニスやサイクリングというスポーツを生み出した。これまで、サイクリングに関しては、自転車の構造上から女性が自転車に乗りやすいブルーマスタイルが一部の進歩的な女性たちの間で流行したことが知られている。筆者はこれまでスポーツのなかでもローンテニスに着目し、また、女子教育とかかわりの深いホッケーの装いについて研究している。

ヴィクトリア朝後期には新しい生活習慣が誕生し、女性の生き方も大きく変容した。なかでも1890年代に登場した「新しい女」は、中産階級の男性を読者層に多くもつパンチ誌に非難の対象としてたびたび風刺画が取り上げられた(図1)¹⁾。右の女性はマスキュリンなテーラード・スーツを着用し、テニスラケットを持っている。イギリス紳士よりも身長が高く描かれたこの新しいタイプの女性は、高等教育へ進学する者や、男勝りなスポーツをする者と結びつけられたのである。実際、20世紀初頭、女子カレッジでのスポーツはエリート女子の象徴にもなっていく。

一方、19世紀末といえ、日本では明治時代にあたる。日本においてもこの時期は女学校創設期である。この時期にキリスト教主義の女学校ではスポーツの対抗試合が実施されている。イギリスの女子教育と同じような過程を日本の女学校も辿っているのである。

今回、筆者が所属する服飾史・服飾美学部会では、日本の女学校創設期当時の貴重服飾資料の現状を調査することとした。これまで各女子大学が保管してきた服飾資



図1. 『世紀末のヒーロー』：
Punch, Oct. 18, 1890

料を記録、保存しなければならないと考えたからである。

そこで、本稿では第一に、19世紀末ヴィクトリア朝のスポーツの流行とその装いについて紹介する。第二に、1878年に開設された梅花女学校創設期の貴重服飾資料の現状について述べる。最後に、服飾史・服飾美学部会がこれから新たに取り組もうと試みている「女学校創設期における服飾に関する貴重資料保管の現状調査とその情報分析・発信」に関する活動を紹介する。

2. ヴィクトリア朝後期のスポーツの流行とその装い

ヴィクトリア朝における服飾は、女性の生き方を表象する役割を担い、当時の女性観を考察する重要な手立てとなる。ヴィクトリア朝後期にはその前期と比べ、帝国主義政策の影響やレジャー、スポーツの流行により、ライフスタイルや女性の生き方が大きく変容を遂げた²⁾。なかでも産業革命の恩恵を受けた新しいスポーツが誕生した。その代表がローンテニスや、サイクリングであった。新しいスポーツは、新しい道具の登場とともに男性だけ

Yuka KODA

梅花女子大学 文化表現学部情報メディア学科教授、博士(学術)
〔著者紹介〕専門は西洋服飾史(19世紀ヴィクトリア朝女性スポーツ研究)／女性学(ヴィクトリア朝後期の新しい女研究)。
現在、産学連携プロジェクトとして、大阪高速鉄道(株)大阪モノレールとの「梅花女子大学×大阪モノレールブログ」の指導を担当している。
<http://www.osaka-monorail.co.jp/baika/>
平成27年5月より、日本家政学会・服飾史服飾美学部会の部会長を務める。

でなく女性にまで流行し、新聞や雑誌でその様子が紹介され、人々の憧れのスポーツとなっていく。科学技術の進歩によりゴムが改良され、ゴム製ボールやゴム底シューズ等のスポーツ道具の品質も安定し、テニス道具セットの価格も比較的手に入れやすいものとなり、ローンテニスが1880年代を中心とした流行に至る(図2)³⁾。そして、1888年の自転車の改良の成功により、サイクリングがブームになり、女性がこれらのスポーツに参加しだすようになる⁴⁾。図3は『女性の権利』と題されたイラストレイティッド・ロンドン・ニュースの挿絵である⁵⁾。新しい女とスポーツと男女同権がイメージとして結びつけられている。

ヴィクトリア社会においては、慎重深く、かawaii女性が理想とされ、女性がスポーツをすることは当初は思いもよらないことであったが、19世紀末には、家族ぐるみで楽しめるスポーツが容認され、しだいに女性が積極的に自らスポーツを楽しむようになる。当時のファッションは、バスルとコルセットという女性の身体を極端に締めつける衣服であった。当時流行したバスルスタイルのドレスが『グラフィック』Graphicに掲載されている(図4)⁶⁾。19世紀をとおして、女性はスポーツを楽しむときでさえ、コルセットを用いたドレスを装った。その過程の中で、スポーツをする際、動きやすい衣服が望まれるようになり、衣服に機能が考慮されはじめる。

女性がスポーツを楽しむはじめた1870年代に流行した娯楽として挙げられるのはクロッカーで、図5は、『グラフィック』1870年6月4日号を飾る挿絵である。クロッカーパーティは、スポーツの場というより、男女の出会いの場とされており、この挿絵からもその様子が窺える。左から2番目の少女のファッションは、「ホワイトサテンのシンプルなコスチュームで、パニエでふくらんだス

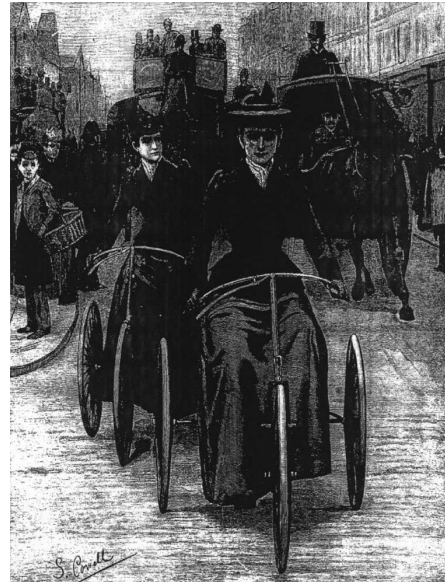



図3. 『女性の権利』

Illustrated London News, Feb. 6, 1892

LAWN TENNIS SPECIALITIES.

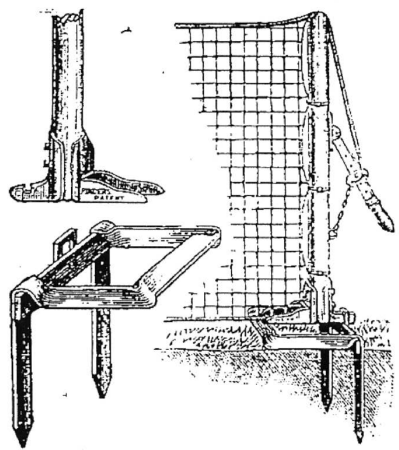


THE
RACKET
OF THE
SEASON.
THE
**WIMBLEDON
HEXAGON**
(REGISTERED).
CRICKET,
ARCHERY,
BOWLS, &c.
GARDEN ROLLERS
GARDEN SEATS
GARDEN TOOLS.
Special Discount
TO CLUBS,
SCHOOLS, &c.
DESCRIPTIVE
CATALOGUES
GRATIS.

THE
WIMBLEDON HEXAGON,
Price 20s.
Vide "The Field," March 8, 1884.
"The patent Hexagon racket has been tried by
several of our friends, and highly approved of during
the winter."

**THE PERFECT
SEAMLESS TENNIS BALLS**
Price 15s. Doz.

BENEFINK & CO.'S



HOLDFAST TENNIS POLES
(Pinder's Patent)
THE BEST IN THE MARKET.
Price 42s.

図2. ローンテニスの道具の広告

The Queen, April 26, 1884



The strictest examiner may try every test of touch and sight without discovering that these are other than the Genoa Velvets they so closely resemble, while the peculiar arrangements resulting in the fast-woven pile enable them to stand interminable and rough wear, which would ruin Real Velvets at four times the price. For costumes and trimmings it is unequalled, and, in fact, for all purposes in which silk velvet may be used, we specially recommend the LOUIS VELVETEEN.

EVERY YARD OF THE GENUINE BEARS THE NAME OF
"LOUIS."

図4. バッスルスタイルのドレス

Graphic, March 1, 1884



図5. クロッケー・パーティ

Graphic, June 4, 1870



図6. ローラテニスを楽しむ方

The Girl's Own Paper, Oct. 14, 1882

カートにはブルーのちょう結びでトリミングされている」と紹介されている⁷⁾。その装いは社交パーティにふさわしい盛装であった。

『ガールズ・オウン・ペーパー』では、1882年10月7日号において、「どのようにローンテニスをやるのか」という記事で新しいスポーツであるローンテニスを詳細に紹介している(図6)⁸⁾。女性がテニスを楽しむ方法を雑誌

で紹介したことは、女性がスポーツをすることを社会が公認したことを意味している。それでも男性は、女性にレディとしてスポーツすることを望んだが、女性はしだいにスポーツそのものを楽しむようになっていく。

19世紀後半のイギリスにおけるスポーツの流行は、1880年代のイギリスの健康志向の流れとともに、女子中

等教育学校と女子高等教育学校のスポーツ熱とも大きく関係していく⁹⁾。

実際、ヴィクトリア朝後期にはエリート女子校のカリキュラムにスポーツが取り入れられていく。1854年に開校したチェルトナム・レディーズ・カレッジは、1875年にテニスを導入する。1890年代になるとホッケーを取り入れるが、校長であったドロシア・ビールが、レディに得点を競う競技スポーツはふさわしくないと対外試合は禁止したという¹⁰⁾。

学校教育の場でも取り入れられたローンテニスは、女子スポーツのなかでも特筆すべき点が多い。当初は男女が出会う場であるガーデンパーティとして楽しまれたため、その装いもファッショナブルなドレスであった(図7)。チェルトナム・レディーズ・カレッジにおいても、初期には特別な装いではなく、日常着でテニスを楽しんだ。20世紀初頭には、女子の教育機関では、ホッケーの装いと類似した白いユニフォームが着用されるようになっていった(図8)。テニスは、ヴィクトリア朝のスポーツのなかで、もっとも優雅でレディらしいスポーツと認識されていたが、学校教育の場においてはプレイ人数に限界があり、団体競技には不向きとされ、このテニスに代わるように登場するのが団体競技ホッケーであった。

ニューナム・カレッジとガートン・カレッジは、女子高等教育機関としてスポーツを積極的に取り上げた学校として有名である。ヴィクトリア朝期に女学校に取り入れられた主なスポーツとしては、体操、ローンテニス、ホッケーが挙げられる。体操は身体の鍛錬のために導入され、初期には「美容体操」という名称でカリキュラムに組み込まれた。ローンテニスはテニスコートが確保できる広ささと、テニス道具さえあれば導入できるスポーツとして、学校教育にも導入されていった。ホッケーは男性スポーツの代表として流行したが、19世紀末、女学校の団体競技として導入されるようになり、20世紀初頭には女子のスポーツ熱の象徴的存在となっていく¹¹⁾。

ヴィクトリア朝期の理想的な女性像としてイメージされる慎み深くかawaii女性と、スポーツというアグレッシブな活動とは相いれない事柄であり、男性はもちろんのこと、母親世代の女性からも快く受け入れられたとは言い難かった。そのような社会状況のなか、女子教育において、19世紀後半に身体教育が導入される上で、レディらしいスポーツとしてのテニスは、エリート女子校を標榜する学校と、生徒の保護者双方にとっても受け入れやすいスポーツであった。一方、男勝りのスポーツとして認識されたホッケーは、レディらしくない、積極的な女性が楽しむスポーツとして、男性と肩を並べるイメージゆえに、エリート女子教育の育成に活用されて



図7. テニスの装い

The Girl's Own Paper, Aug. 26, 1886



図8. テニスのユニフォーム

Corran School (1914)

いった。

たとえば、1875年に設立された学業重視型の学校であるノリッチ・ハイ・スクールにおいてホッケーが登場したのが1898年頃で、ホッケーチームが1901年3月に対抗試合をしたことが紹介されている¹²⁾。そこには、応援歌も同時に掲載されており、ホッケー熱が伝わってくる。チームは、色のついたブラウス、長いスカート、白いベルト、白いスカーフをネクタイ風に結んだ装いであった(図9)¹³⁾。

また、ニューナム・カレッジでのスポーツは、ローン



図9. N.H.S. Hockey Team (1901)



図10. Newnham college Hockey Team (1898)

テニスをもっともはやく人気となり、1878年にテニスクラブが作られている。しかし、1894年までには、ホッケーが主要なスポーツになったとされている¹⁴⁾。初期の女子カレッジホッケーチームは、「白いブラウスとスカーレットのキャップ帽とネクタイとネイビーブルーのサージのスカート」をチームの服として採用していた¹⁵⁾。図10は1889年のホッケーチームの写真である¹⁶⁾。女子カレッジ生は、白い色で統一されたハイネック（中列右端はセーラーカラー）のブラウス、濃い色のロング丈のスカートを着用し、12名のうち6名はネクタイを着用している。1889年の時点では、お揃いのキャップ帽を着用していることがわかるが、帽子の着用はルールで禁止されることになる。

ガートン・カレッジは、1895年に他のいくつかのカレッジとともにオール・イングランド・ウーマンズ・ホッケー・アソシエーションのメンバーになっている。『ガートン・レビュー』において、ホッケーへの関心は他のどんなスポーツよりも広いスペースが占められていた。試合を観戦する場合もプレイする場合もその熱狂ぶりは

明らかで、ニューナム・カレッジとの対抗試合では「ビート・ニューナム ホッケー・ソング」が謳われた¹⁷⁾。また、「ガートン・カレッジ・ホッケー・ソング」においては、「スカーレットのシャツを着た私たちのプレイヤー。ホッケーキャップとショートブルースカート」¹⁸⁾というホッケーのユニフォームに関する言葉が組み込まれ、ユニフォームが愛校心を強化するものとして用いられている。ホッケーが1900年前後に学校の誇りをかけた、なくてはならないスポーツとなっていたのである。

女子教育改革の象徴ともいえるスポーツであるホッケーは、団体競技としての教育効果を期待したもので、女学校とチームへの帰属意識、団結心、競争心という、新しい感覚を女子生徒と女子カレッジ生にもたらした。このホッケーを中核とした団体競技のユニフォームのカラーやネクタイの柄が、エリート女学校のシンボルとして定着していき、学校の誇りを表象する制服へと発展していった。セントレナルズ校の校長を務めたジェイン・フランシス・ダブは、ホッケーなどの「男らしい」イメージのスポーツを称賛しているが、女子に向かないスポーツとして、フットボールを挙げている¹⁹⁾。女子教育改革者といえども、足で蹴るという動作はジェンダーの壁であった。男勝りなスポーツに傾倒する女学生に対して、「ジェントルマンのようにプレイして、レディらしく振舞いなさい」²⁰⁾という言葉を残したことから、ホッケーをはじめとする団体競技の対抗試合において、レディとしての誇りを忘れることなく、学校の名誉をかけて闘ったことがわかる。

19世紀末イギリスにおけるスポーツの流行とその装いの概略をみてきたが、この時期のスポーツは、比較的裕福な中産階級の女性にまでスポーツを楽しむ門戸を開いた。そこには、社交パーティとしての男女の出会いの場が必要であったという社会的事情があったのだが、それを契機に女性のスポーツ参加が公認され、学校教育の場に取り入れられるようになっていったのである。活動的なスポーツには、機能性のある衣服が必要であるということから、女性の装いもスポーツをする際には、比較的シンプルなものに変化していった。イギリス女子教育の現場においては、その装いがやがて制服へと結びついていくことになる。

3. 梅花女学校創設期のスポーツの取り組み

前章では19世紀末イギリスにおける女子教育の現場で、スポーツが授業科目として取り上げられた過程を解説したが、同時期にアメリカの女子教育の現場でもスポーツが取り入れられていた。その現場に立ち合った成瀬仁蔵が、スポーツを日本の女子教育に導入していくのである。

1878年（明治11年）に、澤山保羅、協力者成瀬仁蔵ほ

か教会信徒有志らにより、キリスト教主義を建学の精神とする梅花女学校が大阪・土佐堀裏町10番地に開校された。当時、神戸、京都にはすでにアメリカン・ボードとしての援助で運営されるミッション・スクールが開校されていたが、大阪ではまだ塾の段階に留まっていた。それを日本人の資金で建てられた自給の女学校として設立された学校が梅花女学校である。自給の女学校の成立は、日本のキリスト教会のみならず、世界の伝道地において画期的な出来事であり、伝道地の教会が建てた本格的な学校としては世界最初といわれている²¹⁾。

梅花女学校の1878年という設立時期は、イギリスの女子教育においても1870年代以降に女子パブリック・スクールの興隆が盛んになることと比較しても、かなり早い設立時期である。

今回強調したい点は、梅花女学校が日本の女子教育におけるバスケットボール発祥の地と考えられることである。バスケットボールは日本における女子スポーツにとって重要な位置づけにあるスポーツである。これは、日本の女子教育がアメリカのその影響を大きく受けていることと関係する。19世紀末イギリス女子教育においては、バスケットボールを導入している例は見当たらず、今後、日本の女子教育に導入された経緯を再調査することは重要であろう。

梅花女学校のバスケットボールは、1890年から1894年に校長を務めた成瀬仁蔵によって広められたとされている。現在の梅花学園のホームページにおいて、1909年に女学生のバスケットボール対抗試合が現神戸女学院と実施された記念写真が公開されている(図11)。その写真では、梅花女学生は着物と袴を装い、左胸にアルファベットの‘B’がアップリケされている。

これは明らかに対抗試合のためのスポーツの装いであり、梅花学園創設期において、スポーツウエアの萌芽である装いが女学生に着用されていた。それに加え、1900年頃に女学生に人気であった筒袖を採用していることがわかる。また、他の写真では、着物と袴でテニスを楽しむ姿が認められる(図12)。運動会の日には、当時の普段着である着物と袴姿で綱引きをしていることも明らかとなっている(図13)。

同時期、東京女子高等師範学校では、アメリカ留学を終えて帰国した井口あぐりにより、アメリカ式体操服が制定され、日本女子大学校でも洋服を採用し、東京名物の同校の運動会で洋服姿のデルサートが紹介された²²⁾。しかし、多くの地方の女学校では、たすき掛けて和服の袖をおさえたり、袴の裾をひもでしめてブルマー風にするなどの工夫をして学校体育を行っていたとされている²³⁾。梅花女学校においても、この時期は特別な体操服は着用されていない。すなわち、身体鍛錬のための特別



図11. バスケットボール対抗試合 (1909年)
梅花女学校×神戸女学院 (梅花学園資料室蔵)



図12. 1919年 テニスミックスダブルス対抗試合
梅花女学校×神戸女学院 (梅花学園資料室蔵)



図13. つなひき (梅花学園資料室蔵)

な運動服ではなく、スポーツウエアの萌芽としての普段着を活用した装いが、女学生に装われていたといえる。

以上が、筆者がこれまで取り組んできた研究の概要である。ヴィクトリア朝後期における女性スポーツ服の研究に長年にわたり携わり、イギリスの女性の生き方が大きく変容していく1880年代に関心を持ってきた。その筆者が1878年開学の梅花女子大学に勤務することとなり、創設期の貴重な資料と遭遇したとき、日本の女子教育においても、イギリスと類似する過程をとってきたのだという事実を目の当たりにし、とても感慨深い思いで

あった。本稿で解説してきた19世紀末イギリスのスポーツの流行、とりわけ女子教育現場におけるテニスの導入に着目すると、梅花女学校におけるそれに類似点を見出すのは容易であろう。イギリスにおいては、テニスはレディのスポーツであり、ヴィクトリア朝の女性規範を逸脱するものではなく、当初はファッショナブルな装いでプレイが楽しまれた。日本においても、着物と袴という女学生スタイルでプレイされており、テニスが社会階層の問題を孕んだスポーツであったことが読み取れる。これは、19世紀末から20世紀初頭の女子教育といえば、まだ、一部の女子のステータスシンボルとして機能していたからといえる。女学生であること、テニスを楽しめること、それは、当時の少女たちの憧れであったに違いない。したがって、その装いも運動機能性を重視した体操服ではなく、おしゃれな装いである必要があった。

4. 服飾史・服飾美学部会の今後の方向性

筆者は梅花女学校創設期のバスケットの対抗試合の記念写真と出会い、イギリスの女子教育と日本の女子教育の双方が創設期にスポーツを取り入れていったことを知り、今後は、日本の女子のスポーツ教育とその装いについて研究していきたいと考えている。1880年代のイギリス女子教育におけるスポーツ、とりわけテニスにおいては、レディらしいスポーツであったため、おしゃれな装いでプレイを楽しんだ。また、20世紀初頭の日本における女子教育においても、同じようにスポーツが導入され、着物と袴という女学生スタイルで、テニス、バスケットボールからつなひきまで女学生たちは、装いとスポーツの両方を楽しんだ。このような服飾史・服飾美学研究においては価値の高い記念写真が、現在、各大学に埋もれてしまいつつある。

服飾史・服飾美学は、被服を総合的にとらえ、服飾をとおして人間の営みと、そこに表象された心情を明らかにしていく立場をとっている。その研究のための貴重な文献や遺品が引き継がれてこそ、研究が成り立つ。ヴィクトリア朝後期の女子スポーツ服を研究するにあたり、遺品の重要性を再認識し、日本の女子大学の現状を振り返ったとき、女学校創設期の貴重資料が、保存場所や人材の問題で、消滅していくのではないかと危惧している。そこで、服飾史・服飾美学部会では創設期の女学生の制服の遺品や写真等を何らかの形で記録に残す方法を模索中である。

その第一歩として、女子大学所属の部会員が多数を占める服飾史・服飾美学部会の特徴を生かしたテーマ「女学校創設期における服飾に関する貴重資料保管の現状調査と、その情報分析・発信」の共同研究が計画されている。第一段階の取り組みとしては、文化遺産ともいえる

女学校創設期の服飾資料が、各女子大学でどのような状態にあるのかを、大学ごとに順次報告していくこととした。

最終的には、資料のデジタルアーカイブ化を可能とするシステムを新構築し、資料の散在、消失を防ぎ、さらには資料の保存だけにとどまらず、日本における服飾史・女子教育分野の研究に活用できるよう、ホームページ等を利用して情報発信することをめざしている。しかしながら現段階では、各大学が所蔵する資料の著作権等の問題を解決しなければならない。そういった環境のなかでも、貴重な女学校創設時の服飾資料を後世に伝えることが、被服研究者の使命であると考えている。

19世紀末のイギリスでは、新しい進歩的な生き方をすすめる女性が「新しい女」と揶揄され、批判的な目を向けられることも少なくなかったが、女子の進学熱が高まり、女子教育の現場でスポーツが導入されるようになり、活動的な女性が社会に少しずつ認知されるようになっていった。女性がスポーツを楽しむことで、新しい身体観が生み出され、衣服にも機能的な要素が付加されていくようになり、スポーツを楽しむための装いも登場するようになっていく。同じような過程が日本の女学校でもあったことを、当時の貴重な服飾資料から知ることができたとき、人間の営みの歴史を服飾から読み解くことができることの面白さを感じずにはいられなかった。

服飾史・服飾美学部会の今後の取り組みが、日本の女学校創設期の貴重服飾資料の保存につながることを祈念してやまない。

参 考 文 献

- 1) A Hero "Fin de Siècle." Punch. Oct. 18, 1890
- 2) ヴンクス夫妻著、河村貞枝訳、ヴィクトリア時代の女性たち。創文社、1980、88-89
- 3) LAWN TENNIS SPECIALTIES. The Queen. April 26, 1884
- 4) 好田由佳。19世紀イギリスにおけるサイクリング熱にみる女性像。堺女子短期大学紀要 愛泉学会。1999、34、35-45
- 5) The Illustrated London News. Feb. 6, 1892
- 6) Graphic, March 1, 1884
- 7) Fashion for June. 'A pretty blonde of "sweet sixteen" at a croquet party wore a simple costume of white sateen, the upper skirt, made en panier, was trimmed with large blue bows; a Tyroless, completed this tasteful dress.' Graphic. June 4, 1870
- 8) How I learned to play Lawn Tennis. The Girl' Own paper. Oct. 7, 1882
- 9) 1880年にロンドンでは国際健康博覧会が開催されるなど、健康への関心が高まっていた

- 10) Purvis, J. A History of Women's Education in England. Open University Press, 1991, 87
- 11) 好田由佳. イギリス女子スポーツにおける団体競技の装い—1900年前後のホッケーを中心に—. 服飾美学. 2015, **60**, 23-40
- 12) Girls Public School Trust. Ltd. London. Norwich High School 1875-1950. The Goose Press, 1951, 46-47
- 13) Ibid. 49
- 14) McCrone, K. Sport and the Physical Emancipation of English Women 1870-1914, Routledge, 1988, 35
- 15) Ibid. 36
- 16) Strachey, R. The Cause. G. Bell and Sons, 1928, x
- 17) McCrone, K. op.cit. 30
- 18) Ibid. 21
- 19) Dove, J. F. Cultivation of the Body, Section 3 of Work and Play in Girls' Schools, Vol. 4, Eureka Press, 2010, 400
- 20) Hargreaves, Jennifer Hargreaves, Sporting Females, Routledge, 1994, 68
- 21) 堀田暁生, 西口忠. 大阪川口居留地の研究. 思文閣出版, 1995, 244
- 22) 宇野保子. 日本における洋服受容の過程 明治後期. 中国短期大学紀要, 1997, **28**, 117
- 23) 同上. 117